

ほうおんじようそうもん  
報恩鈔送文

御状ごじよう給たまり候そうらい畢おわぬ。親疎しんそと無く法門ほふもんと申ますは心こころに入れぬ人ひとにはいはぬ事ことにて候まぞ。

御心おんこころ得え候まへ。御本ごほん尊そん図ずして進まいらせ候まへ。此この法華經ほふけは仏ぶつの在世ざいせいよりも仏ぶつの滅後めつご、正しょう法ほうより

も像法ぞうほう、像法ぞうほうよりも末法まつほうの初はじめには次第しだいに怨敵おんてき強かくなるべき由よしをだにも御心おんこころへあるな

らば、日本国にっぽんこくに是こゝより外ほかに法華經ほふけの行者ぎやうなし。これを皆人みなひと存ぞんじ候まぬべし。

道善御房どうぜんごぼうの御死去ごしきよの由よし去いぬる月粗承つきほぼたまわり候まへ。自身そうそう早そう早そうと参上さんじようし此御房このごぼうをもやがてつ

かはすべきにて候ましが、自身みづかは内心うちこころは存ぞんぜずといへども、人目ひとめには遁世とんせのやうに見みえて候ま

へば、なにとなく此山このを出いでず候ま。

此御房このごぼうは又内内人ないないの申し候ましは宗論しゅうろんやあらんずらんと申ませしゆへに、十方じつぱうにわか(分)

て経論きやうろん等を尋ねしゆへに、国くにの寺てら寺てらへ人ひとをあまたつかはして候まに、此御房このごぼうはするが(駿

河か)の国くにへつかはして当時きたこそ来きたりて候まへ。

又此文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ。詮せんなからん人人にきかせなばあしかりぬべく候。又設たといさなくとも、あまたになり候はばほかさま（外様）にもきこえ候なば、御ため、又このため、安穩ならず候はんか。

御おんまへ（前）と義城房ぎじょうと二人、此御房をよみてとして、嵩たかかもり（森）の頂いただきにて二三遍、又故道善御房の御みはか（墓）にて一遍よませさせ給いては、此御房にあづけさせ給いてつねに御聴聞候へ。たびたびになり候ならば、心づかせ給う事候なむ。恐きよう恐きよう謹言。

七月二十六日

日蓮

花押かおう

清澄御房きよすみごぼう